



# 第5回 小児がんケア検討会

## 小児がんと長期フォローアップ～治療開始後の生活をともに考える～

小児がんの治療を経験した子どもたちが社会の中で健やかに成長発達していくためには、子どもと家族がどのような治療を受け、治療が子どもたちのからだにどのような影響があるのかということを経験開始時から知ることが大切です。成長期に抗がん剤や放射線治療を受けた場合、治療終了後にも治療の影響による副作用が残ったり、体調不良を起こしやすかったりします。

小児がんの治療を経験する子どもの生活や将来のことなど、普段なかなか話したり、聞いたりすることのできない疑問や不安をみなさんと話し合ってみませんか。

### < 抄録 >

中通総合病院 小児科 統括科長 診療部長  
渡辺 新 先生

1954年生まれの60歳、生まれと育ちは横浜(日吉)で、1975年に秋田大学医学部に入学し、以後40年間秋田に住んでいます。1981年に秋田大学医学部を卒業し小児科に入局した年に、13人の小児白血病の患者さんが入院され、そのうち8人が現在も元気になっておられ、この経験が私を小児白血病に生涯かけて取り組むきっかけとなりました。

小児癌白血病研究グループ(CCLSG)は1980年に結成された多施設研究グループで、秋田大学小児科は1981年から開始された治療研究に参加し、私は1994年からCCLSGの急性リンパ性白血病(ALL)の研究責任者となり、1994年から開始したALLプロトコルでは、標準危険群における特定薬剤不用、高危険群における自家移植併用、による晩期合併症の軽減を図りました。

日本小児白血病リンパ腫研究グループ(JPLSG)は2003年に本邦の小児白血病研究を行ってきた4つのグループが全て参加する形で発足し、私は初代のALL委員会委員長を務め、本邦に於ける標準治療・診断の確率を目指すため、2011年からT細胞性ALLプロトコル、2012年からB前駆細胞性ALLプロトコルを開始しています。

白血病治療に於いては、治療開始と同時に治療合併症の長期フォローアップが始まることを、患者さん自身を含む家族全員に理解していただくことと、治療によって生じた自分の弱点を積極的にカバーしていくことが重要であると考えています。